

学習者の既知の知識を活用する教材作成

小野 尚美

Material Developments Based on the Activation of
Learner Background Knowledge

Naomi ONO

Seikei Review of English Studies, No.24
Faculty of Humanities, Seikei University
March, 2020

成蹊英語英文学研究
第24号抜刷
2020

学習者の既知の知識を活用する教材作成

Material Developments Based on the Activation of Learner Background Knowledge

小野 尚美

日本の公立中学校、高等学校では、英語指導の際には検定教科書を使う。2020年から公立小学校でも5、6年生の英語の授業が教科となり、検定教科書を使って教えることになる。多読テキストとして英語学習者用に作成されたgraded readers（多読のための英語教材の名称である。様々な内容のテキストの語彙数と文の長さが難易度の段階別になっている）も種類が多いが、投げ込み教材として、英語学習者の語彙や文法レベルと興味を考慮し作成した英語教材を使うもの効果的な指導法である。本稿では、指導している学習者の既知の知識を活用して教材作成する方法について述べる。

1. 学習者の既知の知識と学習をつなぐ

教材作成にあたり、学習者に馴染みのある日本や外国の昔話を英語で読む機会を与えてはどうだろうか。ここで重要な点は、学習者が既に知っている内容を英語で読む機会を与えることによって、英文読解が容易になり、英語による読みの力の育成とともに、英文読解を通して学習者の発想を豊かにすることができるようになることである。この考え方は、Reading Recovery Program（以下、RRプログラムと略す）の基本理念のemergent literacy（リテラシー発現）と指導理念のroaming around the known（既知の事柄を基に未知の事柄を探る）に基づいている（小野・高梨、2014；小野・高梨・土屋、2017）。

2020年から日本の公立小学校では本格的に英語が教科として教えられることになっている。具体的には、高学年の生徒には年間70時間の外国語を科目として教えることになり、中学年の生徒には年間35時間の外国語活動を行うというものである。日本での英語学習への関心は高まりつつあり、学校で英語の授業を受ける前から英語教室に通い、英語についての知識を得ている生徒が少なくない。そのような学習歴も学校での英語の学習に影響を及ぼすが、

そのような学習歴だけでなく、英語を初めて学ぶ生徒はことばについて何らかの知識と経験が既にあり、彼らは英語を学ぶ際にその知識と経験を活用するであろうと考えるべきである。この考え方を emergent literacy という (Clay, 1991)。つまり、小学校での読み書き学習を始める前に既に子どもの読み書き能力の素地はできているのである。毎日の生活環境の中で既に文字 (日本語であったり、アルファベット文字であったりする) を見たり、読み聞かせなどによって音声によってことばを聞くといった言語経験をしているのである。英語という言語に関しても、日本で生活する子どもの周りには多くの英語が存在する。特に英単語のレベルでは、アイスクリーム、アップルジュース、オレンジ、ノートなどのカタカナ語は日本語と一緒に自然に使われている。子どもの読み書き能力発達を助けるためには、彼らが既に知っていることとこれから学ぶ内容をうまく関連づけていくことが効果的読み書き指導である (roaming around the known) というわけである。

また、日本の昔話や子どもの頃読み聞かせなどで既に知っている外国の童話を英語で読むことによって、既に子どもが慣れ親しんでいる話の展開についての知識が物語スキーマ (narrative schema) またはお話しスキーマ (story schema) となって子どものテキスト理解を助ける効果も期待される。心理学では、人が何かを認知する過程で、知識を構成するスキーマ (schema) を活かして物事を理解していると考えられている。読解理論では特にこのスキーマが、読み手がテキストから提供されている情報を理解するときに、自身のスキーマを活性化して読解を助けるので重要な役割を果たすと考えられている。慣れ親しんでいる日本の昔話や物語は既に子どもの知識を構成するモジュールに組み込まれている情報であると考えれば、これらの話を英語で読んだ場合、その物語スキーマを活かして読むことができるであろう。このように文字理解を超えたレベルで内容理解ができていると、英語で書かれているテキストの理解がそれだけ容易になる。

このような考え方に沿った教材を作成するならば、どのようになるだろうか。以下に説明するテキストは、学習者の既知の知識を活用する目的で教材化したものである。

Snow White (白雪姫) は、有名なグリム童話の一つである。この童話は、ヨーロッパ発祥のものだが、日本の子どもたちのほとんどは読み聞かせや童話を読む機会を通して知っている話である。英語で内容を理解しながら、テ

ーマについて考えてみる。また童話の文化的背景についても考察しながら、日本の童話との共通点や相違点についても生徒が意見を述べるように指導していく。テキストの難易度は、Flesch Reading Easeが85.4 (easy to read) で、このテキストが相当する学年は、Flesch-Kincaid Grade Level: 4となっているので米国の小学校4年生レベルとなる。なお、このテキストは、著者が白雪姫の物語を英語で書いたものである。

Snow White (白雪姫)

Once upon a time, a very beautiful princess was born to the King of a country. Her hair was very black. Her lips were as red as blood. Her skin was as white as snow. She was named "Snow White." "What a pretty girl," people would say. Her father was very happy with this pretty princess.

Snow White's stepmother* was a very beautiful queen. Every day, the Queen asked her magic mirror, "Who is the most beautiful woman in this country?" The mirror's answer was always the same. "Dear Queen, you are the most beautiful lady in this country."

Snow White grew up and became a very beautiful lady. She was also a very kind and hard-working girl. She helped clean the rooms and wash the floors every day. One day, the Queen asked her usual question to the mirror. However, it said to her, "Snow White is the most beautiful woman in this country." The Queen was very upset by this answer. She decided that the beautiful princess must die, so she told a hunter to kill her.

The hunter took Snow White to the woods and tried to kill her, but he could not do it because he felt sorry for her. He told her not to come back to the castle. Snow White followed his advice.

Snow White walked around in the woods for a long time. Eventually, she found a little house. She was curious about it, so she went inside. There was no one in the house, but there was a lot of food and wine. Because she was very hungry, she started to eat the food and drink the wine. Afterwards, she became sleepy. She went to another room and found seven little beds. She slipped into one of them and slept like a log.

After sunset, seven dwarfs* came back to the little house. They had been mining coal in the mountain nearby. The seven little men found that all their food and wine had gone. They also found a pretty girl sleeping in one of their beds. What a surprise! When Snow White woke up, she was also surprised to see the seven dwarfs. She told them what happened to her in the woods. Because the men were very kind, they let her stay with them. She took care of their household while the little men were working in the mountain. She had a happy life with them.

One day the Queen asked the same question of her mirror. It said to her, "Snow White is much more beautiful than you." The Queen was very upset and also realized that Snow White must still be alive. She found out that the hunter did not kill the little princess. She decided to kill the princess by herself.

She pretended to be an old woman selling apples. She visited Snow White's little house and sold her a poisoned apple*. "This is a very delicious apple. Would you like to have one?" The old woman looked very nice and kind. Snow White did not realize that she was the Queen. She did not imagine that the apple was a poisonous one. She bought and ate it. As soon as she bit into it, she fell down.

The seven dwarfs returned home and they found her lying on the floor. Even after they waited for her to wake up, she did not open her eyes at all. The seven little men felt very sad about her death.

When the seven men were mourning her death, a young prince approached them. He got down from his white horse and saw the beautiful Snow White lying in the coffin*. He thought, "What a beautiful girl!" Then he kissed her.

Right after he kissed her, her eyes opened. The Prince and the seven dwarfs were very surprised to see her wake up. Snow White and the Prince got married and they lived happily ever after. The seven dwarfs were very happy about their marriage.

(総単語数: 665語)

注釈)

*stepmother 継母

*dwarf < dwarfs 小人

*poisonous apple 毒りんご

*coffin 棺

Questions and Answers in English

- (1) How many people are in this story?
- (2) Let's talk about the people in the story. Discuss in groups and write as many answers as possible.
(なるべく文単位で書かせる。)
- (3) Why do you think so (referring to the answers to Question 2)? For example, why do you think the Queen is evil?
- (4) Why did the Queen want to kill Snow White?
- (5) Why didn't the hunter kill Snow White?
- (6) Why did the seven dwarfs decide to let Snow White live with them?
- (7) Why could Snow White be happy at the end? What is the theme of the story?

2. テキスト理解に必要な語彙力

テキスト理解に必要な語彙力はどのくらいなのだろうか。テキスト理解に関連して必ず出てくる質問であるが、この話題については諸説ある。第二言語習得理論でしばしば引用される説にインプット仮説がある。

Dulay, Burt, & Krashen (1982) は、第二言語習得の5つの仮説の中で、L2学習者(ある言語を第二言語として習得しようとしている学習者)にはその学習者が理解可能なインプットを与えることで、学習者はそのインプットを取り込み、言語を習得することができるという説である。学習者の現在の能力を「i」として理解可能なインプットを「i+1」と表し、「i+1」という抽象的な表現である。読む能力の養成についても、現在の語彙知識よりも幾分難しい語彙ではあるが、学習者に理解可能な情報を与えることで学習者は文脈を活用し推測して意味を理解しながら読んでいく。それを繰り返すことによって読みの能力を発展させていくことができるという考え方である。Dulay, Burt, & Krashen (1982) は特に楽しみながら読むこと (pleasure

reading) の重要性をインプット仮説で説明している。インプット仮説では、第二言語を学習するといった意識をもたずに、楽しみながら読むことで学習者の言語習得に対する意欲を高めることができると説明している。そして、幾分知らない語彙がある読み物でも、そのレベルが「i+ 1」(理解可能なインプット) であるならば、既知の情報を使い、文脈に基づいた理解を経て、意味理解が可能となる。

英語を主要言語として学ぶ学習者が読む場合のテキストの難易度についてClay (2005) は、易しいテキストを95%から100%の正確さで読めるレベル、難しいテキストについては80%から89%の正確さで読めるレベルであるという基準を設けている。読みの能力の測定は、90%から94%の正確さで読めるレベルのテキストで実施すべきだとしている (Clay, 2005)。このレベルは、読み手が知らない語彙または正確に覚えていない語彙を文脈や既知の情報から推測することによる理解が可能だということを意味している。

一方、情報処理理論 (Information Processing Theory) では、読解能力を高めるためには、読み手の言語能力よりも易しいレベルのテキストを読み続けることにより、言語処理能力が自動化して、読解能力が向上すると考えられている。読み手の現在の読解能力を「i」とすると「i-1」のレベルのテキストを読むべきだということになる (Day & Bamford, 1998)。例えばgraded readersで、読み手が辞書なしで楽しんで読むことのできるレベルがLevel 4だとすると、そのレベルにあるテキストをよく読み、読みの能力が自動化してきたら、次のレベルのテキストを読むといった方法である。情報処理理論では、テキストの情報を理解する過程が自動化するかどうかを読解力向上には重要なのである。

筆者は英語リーディングの授業で読みの訓練のために多読をさせる。学習者が多読用のテキストとしてgraded readersを選ぶときの基準として、最初のページを読んでみて、内容理解するためにどうしても辞書で意味を理解する必要がある語が5語以上ある場合は、そのレベルより一段レベルの低いテキストを読むよう指示を出している。もっとも、そのテキストが有名でどの学習者にも分かるものである、または学習者が既にそのテキストを日本語で読んだことがあるという場合は、多少分からない英単語があっても理解できるであろう。読み手は、内容理解のために様々なヒントを使って読むために、どの程度読解できるかその程度は、新出単語や文構造の複雑さだけで決まる

わけではない。

3. まとめ

インプット仮説と情報処理理論のいずれの考え方であろうとも、学習者が既に聞き慣れている（または母語で読みなれている）話を英語で読むことは読解力養成には役立つといえる。既に知っている話であれば、いくつか知らない語が出て来ても推測して内容理解ができる。もし新出単語がわからなければ、視覚教材で示す、前もって意味を理解させておくなどの指導をするとよい。視覚教材を使ってOral Introductionで内容を説明し、学習者に質問することでスキーマを活性化し、読む前に少しでもテキストの内容を理解させてから読ませるのも効果があるだろう。Roaming around the knownの理念は、どのような言語を学習するにも学習者が「知っていること」から「新しい事柄を学習する」方向に進むということを示している。

参考文献

- Clay, M.M. (1991). *Becoming Literate: The Construction of Inner Control*. Auckland: Heinemann Education.
- Clay, M.M. (2005). *An Observation Survey of Early Literacy Achievement*. North Shore: Pearson Education.
- Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Melbourne; Cambridge University Press.
- Dulay, H., Burt, M. & Krashen, S. (1982). *Language Two*. Oxford University Press.
- 小野尚美・高梨庸雄. (2014年). 『「英語の読み書き」を見直す —Reading Recovery Program研究から日本の早期英語教育への提言—』東京：金星堂.
- 小野尚美・高梨庸雄・土屋佳雅里. (2017年). 『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開発研究』東京：朝日出版社.